

# 東日本支部だより

2016 年 11 月 10 日発行

Newsletter of the East Japan Chapter, the Society for Research in Asiatic Music

## ■定例研究会のお知らせ

### 今後の例会予定

12 月以降は下記の日程で開催を予定しています。ふるって  
のご参加、お待ちしております。

第 93 回 12 月 17 日 (土) 於: 大正大学

研究発表、特別企画。

\*詳細は下記をご覧ください

第 94 回 2 月 4 日 (土) 会場未定

研究発表ほか。

\*1 月下旬にお知らせいたします。

第 95 回 3 月中旬予定 会場未定

卒・修論発表。

## 〈特別企画〉

### 2. 未来に文化をつなぐための協働

—ブータンの遊び歌ツァンモの展開—

伊野 義博(新潟大学)

加藤 富美子(東京音楽大学)

権藤 敦子(広島大学)

司会: 奥山けい子(東京成徳大学)

## ■定例研究会発表募集について (2 月例会)

東日本支部では、会員の皆様による活発な研究活動のため、定例研究会での研究発表を募集しております。発表をご希望の方は、発表種別(研究発表・報告等)、発表題目、要旨(800 字以内)、発表希望月、氏名、所属機関、連絡先(住所、電話、Fax、E-mail)を明記の上、東日本支部事務局まで E-mail: tog.higashi@gmail.com か、郵送でお申し込み下さい。2 月例会での発表希望は 11 月 20 日必着にてお願いいたします。なお、メールご利用の方で、発表希望を提出後 1 週間経ても東日本支部事務局から連絡がない場合には、メール事故等の可能性がありますので、お手数ですが、再度ご連絡ください。

## ◆東日本支部 第 93 回定例研究会

時 2016 年 12 月 17 日(土)午後 2 時～4 時 45 分

所 大正大学 552 教室(5 号館 5 階)

(豊島区西巢鴨 3-20-1)

都営地下鉄三田線西巢鴨駅下車 徒歩 2 分、

JR 埼京線板橋駅東口下車 徒歩 10 分、

都電荒川線庚申塚駅又は新庚申塚駅下車 徒歩 7 分)

## 〈博士論文発表〉

### 1. 山口巖の生涯

—箏曲界に与えた影響とその業績—

福田 恭子(東京藝術大学)

## ■定例研究会の報告

### ◆東日本支部 第 91 回定例研究会

時 2016 年 6 月 11 日(土) 午後 2 時～4 時 10 分

所 国際基督教大学 H402 教室

司会 マット・ギラン(国際基督教大学)

## ○博士論文発表

### 1. 徳丸流神楽の成立と展開

—民族音楽学的芸能史研究—

川崎 瑞穂(国立音楽大学大学院)

(発表要旨)

埼玉県秩父市の旧荒川村と旧大滝村には、安政年間(1854~1859)に徳丸という人物によってもたらされたとされる3つの里神楽がある。本発表では、「徳丸流神楽」と呼ばれるこれらの神楽の成立と展開の過程を明らかにした発表者の博士論文の大略を紹介した。

本論文は「成立」と「展開」の2部構成となっている。第1部第1章「徳丸流神楽概説」では3つの徳丸流神楽を概観し、続く第2章「神明社神楽における「伊勢神楽」源流考」では、徳丸が手を加える以前の神明社神楽、すなわち伊勢神楽について、できる限りの考察を試みた。第3章「徳丸がもたらした神楽と「上州神楽」」ではまず、旧荒川村に傳承されている「徳丸伝承」について考察し、徳丸が上州方面から来秩した渡り職人か、荒川流域の漂泊民であった可能性を指摘した。次に、徳丸がもたらした神楽がどのようなものであったのかについて考察するために、神明社神楽の第11座「蛭(えび)児(す)座」の分析を行い、そのルーツが上州(群馬県)方面である可能性を示した上で、徳丸がもたらした神楽が成立した時期について考察した。

第4章からが第2部である。第4章「徳丸流神楽における演目の変容と生成」ではまず、徳丸流神楽における「岩戸開き」を題材とした演目の比較分析を通して、徳丸流神楽が成立以降、どのような地域変容を遂げたのかについて考察した。次に挙げる神明社神楽の「三神和合座」と三峯神社神楽の「三神和合」の分析では、これらの演目が、浅間神社神楽には存在しないことに注目し、「三神和合」を題材とする演目が、神明社神楽の演者によって独自に付加されたものである可能性を指摘した。次に、逆に神明社神楽にのみ存在しない、ヤマトタケル伝承を題材とした演目の分析

を行い、浅間神社神楽と三峯神社神楽においてこれらの演目が付加された可能性を指摘した。第5章「徳丸流神楽における演目の中断と改編」では、徳丸流神楽における「失われた演目」と「中断・改編された演目」の分析を行った。まず、神明社神楽の「蚕(かいこ)神(がみ)座」と浅間神社神楽の「蚕神」について、秩父地方の養蚕文化との関係から考察し、これらの演目が、明治初期から明治13~14年頃までの好況期に成立し、秩父事件の勃発した明治17年から、遅くとも、明治22年までの間には消滅した可能性を指摘した。次の神明社神楽の「三韓座」の分析では、この演目に用いられる囃子(調連)に注目し、そこに幕末の鼓笛隊が使用していた旋律の影響があることを指摘した。第6章「結論」では、本論文で明らかになった徳丸流神楽の形成プロセスについてまとめたのち、徳丸流神楽の変容には、常に各時代を特徴付ける信仰や戦争の影響がみられることを指摘した。

(傍聴記:加納 マリ)

川崎氏はこれまでに秩父の神楽を対象に研究を行ってきており、今回の発表は、秩父神楽の一つである「徳丸流神楽」の成立と展開に焦点をあてた博士論文の一部であった。これまで民俗芸能研究を歴史や社会構造などの切り口で行ってきた川崎氏が、今回は音楽の分析を通して新たな展開を示したもので、史料の少なさをゆえにこれまで取り上げられる機会がなかった徳丸流神楽の歴史が音楽、演目、信仰などの分析により明らかになり、史的研究の可能性が拓けたと結論付けている。民俗芸能の研究はさまざまな視点からの研究が可能であり、民俗学、歴史学、社会学、音楽学など学問の領域を越えた学際的な研究といえる。今回の副題「民族音楽学的芸能史研究」はまさにそうした傾向を示すものであるが、音楽とのかかわりが深い神楽の研究には音楽の追究は必至であり、秩父の神楽に限らず各地の神楽研究の方法論にも言及が欲しかった。今後の研究にさらに期待したい。

## 2. 幼児期の文化学習としての日本音楽の経験の意義

### —長唄ワークショップの実践を通して—

鹿倉 由衣(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

本研究の目的は、日本音楽の稽古のワークショップを通して、子どもの文化学習としての日本音楽の経験の意義を提示することである。

本研究の対象と方法は以下の通りである。①これまでの長唄の稽古の歴史および全盛期の長唄の稽古の様子について、文献による調査と経験者を対象とした聞き取り調査によって分析し、稽古の内容や特徴などに学習科学の観点から考察する。②幼児を対象とした長唄のワークショップを開発する。ワークショップの素材として用いた楽曲の特徴を発展の経緯や曲の背景とともに整理する。伝統的な長唄の稽古の特徴と幼児期の学習の発達の特性を踏まえて指導方略の観点を導き出し、詳細な計画をおこなう。③実践のなかでの子どもの姿を、指導方略の観点にそって分析する。これらを通して子どもの文化学習における日本音楽の経験の意義を考察した。

聞き取り調査を通して分析した女性の師匠による子どもを対象とした手ほどきの稽古の特徴と、幼児期の学習の発達の特性と照らし合わせて、指導方略の観点として、①子どもの生活と密着した稽古の設定であること、②一回の稽古は短いフレーズであること、③憧れの対象の模倣を繰り返すことによる学び、④学習者が自ら課題を設定することの4点を導き出した。

本論においては、文化を意味の体系として捉えることとした。文化特有の意味の理解を獲得する体験として、日本音楽を学ぶことを位置付けることができる。日本人であるから日本音楽を学ぶことが重要であるということを超えて、日本の中で培われてきた言語、音に対する感覚的理解そのものを体験することに意義を見出すものである。子どもたち

が、手本の模倣を繰り返すうちに、「わざ」の詳細を掴み取る過程には、自らの身体についてのイメージや、物語も含めた師匠の手本の世界観を想像することが強く作用している。師匠の全体像と詳細とを往還的に見ることで、自分なりの「とうとうたらしさ」に行き着くのである。そして、そのイメージの言語化を通して他者と共有、共同することでより表現を洗練させる過程へと入る。これらすべては日本音楽の稽古に含まれた学びである。相手と自分のイメージを重ね合わせること、実際に声を出すことなどを通して子どもが確立する「わざ」に、表現の育ちの可能性を見ることができる。稽古の体験を通して、子どもの中に文化的な豊かさの広がりをもたらすことが、幼児期に日本音楽を学習することの意義であると本論では結論づける。

(傍聴記: 田村にしき)

発表では、幼児期に文化学習として日本音楽の稽古を経験することの意義を、長唄のワークショップの実践における子どもの姿の分析から明らかにしていた。

質疑応答では、ワークショップの内容や期間に関して、長唄の他、お囃子の実践や見立て楽器を使った三味線の実践などを継続して行うものがあることが説明された。園で継続した実践を積み重ねると、年中の子ども達は年長の姿に憧れを抱き、模倣を繰り返す学習を積み重ねることで、日本音楽の学習の仕方が身に付くと答えた。

指導の中での問いかける教授法や、音の感覚を言語化することに関する質問に対しては、子どもたち自身が「長唄らしさ」を見出せるよう意図をもって問いかけをしていること、言語化することが目的ではないが、集団で学習していることを生かすには、子どもが感じる「らしさ」を共有することが大切であることが指摘された。

今後の研究の課題として、諸外国の実践との比較研究もしていくと良いという意見が出された。

### 3. 近世邦楽言語の行方

#### —西洋音楽との「萃点」における一考察—

佐藤 岳晶(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

本研究は、近世邦楽の特質について、特に「音楽言語」の観点から、西洋音楽との対照を交えた考察により、その一端を明らかとし、同時に、この二つの音楽を隔てる「差異」の類推から、音楽文化の多様性について再考することを目的とした。近代化、そしてグローバル化に伴う西洋音楽の世界的規模での影響力・ヘゲモニーの拡大の中、近世邦楽は、一方の流れにおいてその影響を受けつつも、他方では、今なお西洋音楽とは異質な姿が伝承されている。この貴重な文化資源の継承において、グローバルな地平における音楽文化の多様性へ資するべく、社会学者の鶴見和子の「内発的発展論」を背景に、西洋音楽との「共進化」を目指し、その交点＝「萃点」において省察したものが拙論である。

考察は、地歌箏曲と長唄を主な対象とした。前者においては、「双調会」の家元で重要無形文化財保持者の二代米川文子師に実技指導を仰ぎ、同会の名取として演奏経験も重ねられた。後者においては、今藤流の今藤尚之師、ならびに今藤長龍郎師に実技指導を仰いだ。それらの参与観察が、本研究の基盤である。

拙論は、序章とそれに続く三つの章から構成される。

序章「近世邦楽と西洋音楽の『萃点』から——音楽言語の翻訳と創造」では、研究目的・背景などを述べた。

続く第1章「グローバル化世界を生きる近世邦楽——普遍／差異、音楽・言語の『抗争(ディフェラン)』の狭間で」では、近世邦楽と西洋音楽の対照から、音楽の多様性の根拠の一つとして、両音楽言語間の「差異」と、その「非共約性」について再考した。言語学やポストコロニアル文学の議論も参照しつつ、グローバル化世界における近世邦楽言語の位置・価値が再考され、多様性を抑圧する「普遍」ならび

に西洋(音楽)のヘゲモニーを越えうる創造のあり方が模索された。

第2章「松阪春栄の二面箏による音楽言語と創造——ヘテロフォニーのリズミック『錯乱』」においては、明治期の地歌箏曲家である松坂春栄の箏曲における、箏二面を用いたテクスチャを分析した。ヘテロフォニーを原理とする多音性から、現代にも通じる複雑な響きの綾が、どのようにして生み出されたのかを考察しながら、近世邦楽が爛熟期に到達した高度な音楽言語と、その作曲技法の現代への継承について考えた。

第3章「近世邦楽の口承性(オラティビー)の行方——長唄三味線 今藤長龍郎師の稽古の考察から」では、今藤長龍郎師による口承を基とする稽古の参与観察から、長らく近世邦楽の伝承の根幹であり続け、その音楽言語の特質にも刻み込まれた口承性について再考した。そして、稽古法の変化に伴う口承の役割・あり方の変化を省察しつつ、今後の近世邦楽、ならびにその音楽言語の伝承の行方を展望した。

(傍聴記: 福田千絵)

発表者は、西洋音楽理論を専門として教鞭を取りながら、邦楽にも造詣が深いという経歴の持ち主である。箏曲および長唄を本格的に学んでおり、邦楽の作品、稽古、習慣などにも精通していると思われる。博士論文は、前半は西洋音楽と邦楽の差異についての考察、後半は箏曲と長唄の事例研究であり、発表では、前半部分を丁寧に解説された。フロアからは、西洋と日本を対立させる考え方について疑問が呈されたが、質疑において経験にもとづく口頭伝承の一面が述べられたのは幸いであった。博士論文では詳述されていると推察されるが、発表においては、箏曲と長唄の事例研究について具体的な提示が少なく感じられた。現在は、発表者の述べる「邦楽言語」を明らかにすることが、邦楽の理解と普及のために各方面から求められていると思う。発表者は、それができる貴重な存在である。今後、研究

で明らかになった邦楽言語を積極的に発表されることを期待したい。

#### 4. 韓国農楽における個人演奏者論

##### — 羅錦秋名人の芸術世界とその継承 —

神野 知恵(東京藝術大学大学院)

(発表要旨)

本発表では博士論文「韓国農楽における個人演奏者論— 羅錦秋名人の芸術世界とその継承 —」について紹介した。本研究は、韓国の打楽器芸能である農楽において、特定の奏者に注目する「個人演奏者論」である。研究対象の羅錦秋(ナ・グムチュ、1938年生まれ)は、1950年代末に韓国で流行した「女性農楽団」と呼ばれる女性興行公演グループのリーダー奏者として活躍した人物である。本論文は、羅錦秋のライフヒストリー、演奏の特徴、そのわざの継承という三つのテーマで構成される。今回の発表では研究を通じて得られた成果のうち、ライフヒストリーと、演奏分析の結果について述べた。

農楽が団体芸能であることから、これまでの先行研究には、個人の演奏者を主題として扱う研究はあまりなかった。しかし、団体のなかでも特定の構成員が技能の伝承などにおいて大きな役割を担っている場合が多いため、個々の奏者の活動経歴や、演奏上の特徴に注目する必要があると言える。近現代韓国芸能史の一面を読み取るという意味でも演奏者のライフヒストリー研究は重要である。本発表では、羅錦秋が田舎の末娘として生まれ、菓売りの劇団につれられて家出し、パンソリや舞踊の訓練を受けた後に女性農楽団に入団して全国を巡業していくようになるまでのエピソードを簡単に紹介した。

さらに羅錦秋のような興行農楽の演者たちは日々繰り返し公演を行っているため、個人による創意工夫や演出が著しく見られ、村祭りの農楽に比べて音楽的にも非常に複雑に発展している部分がある。本研究では、羅錦秋が現在伝

えている農楽のケンガリ(鉦)の演奏のスタジオ録音を行い、その記譜を通じて、多様で繊細、装飾的なパターンやフレージングのバリエーションを抽出・分類した。

女性農楽団と羅錦秋の事例は農楽の伝承全体から見れば特殊な例ではあるが、先代の男性農楽奏者や、舞台芸能者たち、地域に伝わる農楽などの豊かなわざを吸収し、膨大な公演経験を通して「芸術」としての農楽の境地を切り開いたという点でその歴史的価値は特筆に値するといえる。また、近現代韓国における民俗芸能の変容について知るためにも大きな手がかりをもたらしてくれる。音楽上でも羅錦秋の演奏は多彩で独創的な発展を極めており、本研究において羅錦秋の演奏のバリエーションを集積した作業は、羅錦秋の技術の高さだけでなく農楽そのものが持ちうる音楽的多様性をも示しているといえる。

(傍聴記: 山本華子)

韓国ではこれまで研究の対象となりにくかった「女性農楽」を、しかも羅錦秋という「個人」の奏者に焦点をあてて行った新しい視点からの研究である。発表者の能力を存分に活かした、つまり韓国在住により身につけた高度な演奏技術と言語能力をもってこそ成し得た力作といえる。

本発表では、博士論文の第1章と第2章にあたる羅錦秋のライフヒストリーと音楽的特徴を明らかにした。採譜分析によって、羅錦秋の演奏は音色やフレージング、旋律的な表現を重視しており、従来の奏者とは異なる即興的なリズム表現も見られたが、それはパンソリや器楽を先に学習した影響ではないかとの見解が示された。フロアからは、声音と口音の違い、女性演奏者たちの今後のあり方、伝統的な井間譜で採譜するメリットなどについて質問があった。最近新たな資料(古い録音)も発見されたそうだが、羅錦秋が存命のうちに彼女の芸術世界をさらに追究し、韓国国楽研究や女性学研究に一石を投じる研究となることを期待している。

## ◆東日本支部 第92回定例研究会

時 2016年7月2日(土) 午後1時30分～4時20分

所 大東文化会館 1Fホール

司会 伏木香織(大正大学)

### ○研究発表

#### 1. 倍音の強調という観点による合竹の音韻的構造の解釈

大塚 一輝

(発表要旨)

笙により奏でられる10種の和声、合竹を構成する音列はその成立過程が不明であると同時に西洋の和声学体系では合理的な説明ができない。これまで林謙三、荻生徂徠、鈴木二といった研究者らが五度を中心とした相性関係の組み合わせを原型とし、それでは説明のつかない工下美をはじめとする和音に対しては媒音という概念を導入することで説明を試みてきたが、特に媒音による解釈はやや強引とも言える感があり全体としては一貫性に欠く解釈であった。これらはそもそも合竹の和音内部においてのみ成立の根拠を求めていた点に不備があったと思われる。

本論文ではまず合竹の構成音の中で中心となる基音とその他の音の相性関係について、より根源的な音響物理学的観点から倍音がよく重なり強調することをより調和する音程関係とし、各和声の基礎である基音の倍音列に対して基音以外の上部音がどれだけよく重なっているかを分析した。すなわち合竹の音列は基音の倍音成分とよく重なり強調しあう構造をもつことを仮定した。なお、合竹の構成音程については平均律に近似されたものを用いた。これは一度近似してしまえば周波数比率の上ではおよそ過不足なく議論可能だからである。

この分析結果から基音の倍音列と上部音がよく重なり合うものとそうでないものが見られたが、さらにここで主旋律を中心に据え笙を含む他の楽器がこの主旋律を補完

し推進させる職能として編成される雅楽の基本的構造に立ち戻りこれら一部の合竹の基音が実際には旋律楽器の都節音階と和声楽器の律音階との間での音程系列の差異から生じた「すれる」現象により半音上下行している点を考慮しこれを補正して再度分析を行った。

すなわち合竹「工」の基音をc#でなくc'、「比」の基音をcでなくd、「美」の基音をg'#でなくgに変換した上で分析することにより、10種の和声についてそれらすべてが主旋律の音程を基音と見た時の基音の倍音を強調する構造にあることを示した。

(傍聴記:遠藤徹)

笙の合竹の音響を箏のすれる音程との関係から考察したのは面白い観点であったが、それを合竹の根源に結びつけるのは飛躍があるように思われた。当日指摘したように増本喜久子氏、小泉文夫氏の著書のみから立論するのは、少し無理があるが、それははともかくも、すれるという現象の起源についての考えを論拠とともに示すことが、最低限必要であろう。また五線譜化された楽譜のみによる分析というのも方法的にいかがなものであろうか。更衣の演奏を一度でも聴いていれば、合竹を使用しない催馬楽が例として不適切であることにすぐ気がついたであろう。折角冒頭で越天楽と西洋音楽のスペクトラムの興味深い比較を提示していたので、着想を活かすには、音響の解析を中心に据えて、現代の雅楽の合奏における笙の合竹の隠された効果というような形で提示する方法もあったのではないか。なお発表者が西洋的解釈の中に含めた荻生徂徠は江戸期の学者である。西洋の影響を受ける以前の研究ではその他、田安宗武の研究が重要であることも付記しておきたい。

### ○特別企画

#### 2. 南音とシンガポールにおける南音

レクチャー&デモンストレーション

湘霊音楽社

通訳:Aerin Lai(お茶の水女子大学)

司会・特別企画コーディネータ:伏木香織(大正大学)

(発表要旨:伏木香織)

本特別企画は、湘霊音楽社の日本公演に際して特別に講演をお願いしたものである。湘霊音楽社はシンガポールで最も古い南音の音楽集団の系譜をもち、湘霊音楽社を名乗ったのは1941年で、その後現在まで、活動を停止することなく継続してきている。

本企画ではまず、シンガポールにおける南音の歴史とその特徴について講演が行われた。シンガポールに南音がいかにして持ち込まれたのか、という点について、他の地との違いとして「歌旦」の関わりがあったことは特筆されてよい。さらに第二次世界大戦後、人気低迷した南音の再興に、湘霊音楽社の前社長丁馬成がどのように関わったのか、そして南音の国際交流と南音の改革をいかに進めたのかが紹介された。特に新たな歌詞ジャンルを加え、新たな歌曲群を作り出し、古典曲などとともに出版してその体系を整理し、新作梨園戯などを精力的に発表してきたことを紹介するとともに、国家を表象する歌曲として作曲された《東方花園》の実演紹介を行った。

そして湘霊音楽社が現在も取り組む、こうした創作の知識と実践のもととなっている指套・散曲・譜の三大ジャンルについて、楽器編成の紹介、楽曲構造の基本について、実演を交えた講演を行った。実演では、歌を歌わなくなった歌詞を伴う組曲である指套のジャンルから、指套《記相逢》より《霏霏颯颯》、《且去禅床》が紹介され、歌曲の散曲では『留鞋記』より《暗想暗猜》が、器楽曲の譜では、四大作品のひとつで、四季の景色を映す《四時景》より《立秋(暮蟬輕躁)》《秋分(零露飄玉)》《立冬(霜鐘逸響)》《冬至(急雪飛花)》が紹介された。

時間の都合により、創作舞台作品を、実演を交えた形で紹介することはできなかったが、実演を担ったのは湘霊音

楽社の次世代を担う若者たちであり、講演は、その指導者である林少凌氏であった。

また本企画には、この湘霊音楽社の代表で丁馬成の子である丁宏海氏、現在の副代表で、指導者でもある王碧玉、またシンガポールの若者たちの南音教育プログラムで重要な役割を果たしている蔡維鏢氏などが参加しており、リハーサルなどでは若者たちを指導する様子を見ることもできた。

(傍聴記:小日向英俊)

湘霊音楽社(Siong Leng Musical Association)は、中国・福建省から、台湾や東南アジア諸地域で演奏される南音の、シンガポールの演奏団体である。他会場での2回の公演も堪能した報告者にとり、本例会は貴重な体験だった。講師の林少凌氏、音楽社の全メンバー、そして彼らの来日を例会とした企画者伏木香織氏と例会担当者に感謝したい。

南音が19世紀前半にシンガポールへ伝わり盛んになる中、1910年設立の前身団体を経て1941年に設立された湘霊音楽社は、1960年代以降の南音の衰退や、文化大革命の影響による伝承困難期にも、その再興と伝承継続を担い現在に至った。古典曲だけでなくシンガポール独自の新曲や独自の新作音楽劇をも上演し、若手育成にも注力しているとのことである。

レクチャーは、南音の漢、唐、宗に遡る長い歴史、使用言語が閩南語であること、現在漢族が有する音楽で最も古いことなどの基本事項、閩南人の移民による東南アジアへの伝播などから始まった。'70~'90年代に伝統の維持、改良、発展に寄与した前社長の丁馬成(?~1992)の功績が、シンガポール南音の現在形を作ったと紹介され、その作品《東方花園》が演奏された。その後、三種の伝統的レパートリー「指套(指)」「組曲」(組曲)、「大譜(譜)」「(標題を持つ器楽曲)」「散曲(曲)」「(歌曲)の音楽例実演、琵琶、三弦、洞簫、二弦などの使用楽器の紹介へと続いた。

新作の場合の新しい歌詞と旋律の関係、大陸側とシンガ

ポール側のレパートリーの違い、異文化音楽とのフュージョンなどについて、フロアからの質問もあった。回答からは、この音楽社が持つ「創造的側面」が読み取れた。企画者も他所で指摘するように新作活動に反対する演奏団体もある中、シンガポールにおける南音は文化政策、観光、多文化(民族)性、オーセンティシティなど様々な文脈での研究が進むことが期待される。ただ会場担当者の準備不足のため、PAに聞き取りにくい点があり悔やまれた。

\*\*\*\*\*

## ■会員の声 投稿募集

1. 次号締切: 2017年2月10日 (3月上旬発行予定)

2. 原稿の送り先および送付方法:

学会本部事務所(郵送、Fax またはメール)

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

Fax: 03-3832-5152、E-mail: tog.higashi@gmail.com

3. 字数・書式: 25字×8行以内(投稿者名明記のこと)

4. 内容: 会員の皆様に知らせたいと思う情報

(1) 催し物・出版物などの情報

研究会、講演会、演奏会、CD、DVD、書籍出版、展示、見学会などの情報。

(2) 学会への要望や質問

支部例会、大会、機関誌など、学会に対する感想や要望。

\*原稿の採否は「支部だより」担当者にご一任下さい。編集の都合上、お送りいただいた原稿に多少手を加えさせていただきますので、ご了承ください。

(東日本支部だより担当)

## ■編集後記

今号の支部だよりでは、6月に行われた博士論文発表、及び7月の例会における研究発表と特別企画の報告を掲載いたしました。原稿執筆にご協力下さった方々にこの場をお借りして御礼申し上げます。

東日本支部では、今後も研究発表や企画など皆様からのお申し込みをお待ちしております。本誌での「会員の声」にも情報をお寄せいただき、積極的にご活用ください。次号の発行は3月上旬を予定しております。(F)

\*\*\*\*\*

発行: 一般社団法人 東洋音楽学会 東日本支部

編集: 尾高暁子、澤田篤子、

近藤静乃、田辺沙保里、福田裕美

〒110-0005 東京都台東区上野3-6-3 三春ビル 307号

東洋音楽学会東日本支部事務局

E-mail: tog.higashi@gmail.com

\*\*\*\*\*